

第 5 章

研究のまとめ

研究のまとめ

1 3年次の研究成果

本研究は、「合わせた指導」において学習内容を明確化し、学習評価の改善・充実を図ることで、児童生徒の「確かな学び」を育む授業づくりを目指してきた。今年度は、昨年度までの研究成果をもとに学習内容の明確化、学習評価の改善・充実を図り、授業実践を通して、学習評価を効果的に活用した児童生徒の『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」をまとめることを目的として、「単元計画評価シート」を用いて、児童生徒の「単元を通して目指す姿」の評価、確かな学びの見取りを行った。

今年度の研究の成果は、以下の2つにまとめることができる。

- 授業づくりに対する視点の広がり
- 単元計画評価シートの活用性の向上

1-1 授業づくりに対する視点の広がり

今年度は、『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」を各学部で検討し、それを取り入れて「単元計画評価シート」を作成、活用しながら授業実践を行った。各学部の研究の成果では、授業づくりに対する教員の考え方や視点の広がりが報告された。本研究における「授業づくり」とは、1 単位時間あたりの授業という考え方に限定したものではなく、単元計画にかかわること、授業の構成にかかわること、教材教具にかかわること、個々の児童生徒への支援・手立てにかかわること等、「授業」を行う上で必要な内容として検討してきた。これまでも本校では、児童生徒の実態把握を行い、単元の目標を立て、それを達成するためにはどのような指導計画、単元計画が必要か、また、個々の児童生徒にどのような支援・手立てが必要かを考え実践してきた。また、学部として、様々な実態の児童生徒に対して、「授業づくり」に対する共通の視点をまとめてきたが、年数を経て形骸化しあまり活用されていなかったり、時代や社会の変化に合わせてアップデートが必要な内容になっていたり、そもそも共通の視点をもてていなかったりしている状況がみられた。そのため、本研究では、改めて各教員がこれまでの実践を振り返り『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」を、時間をかけて検討し、授業づくりに足りなかった視点や考え方は何か、授業づくりに対する視点や考え方は偏っていなかったか等、自分事として考えていくことで、これまでなかった視点や考え方を新たに得ることができたと考えられる。また、授業づくりの要点を踏まえて授業づくりを行い、児童生徒の学習の様子の変化、目標の達成状況などに手応えを感じたことで『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」の成果が実感できたのではないかと考える。

中学部からは、生徒の学ぶ姿をもとに授業づくりの要点を考えて、具体的な支援・手立てにつなげ、学びの姿を明確にすることで、授業者である教員がどのように授業づくりに取り組めばよいのかが明らかになったという報告があった。児童生徒らの学びをどのように設定するかについては議論が必要だが、児童生徒の学び方が単元の学習を経てどのように変化するかを想定して授業づくりを展開していくといった考え方は、他の学部でも取り入れることができるのではないかと考える。本研究における『確かな学び』を育むための授業づくりの要点」は、学部間で系統性を持たせることを前提としてはいない。しかし、『確かな学び』を育む」という目的は全学部で共通している。そのため、本研究で得た成果を学校全体として共有し、様々な考え方を取り入れていくことで、よりよい授業づくりや学部間での授業

づくりの系統性が図られていくことにもつながるのではないかと考える。

1-2 「単元計画評価シート」の活用性の向上

昨年度までは、研究目的の達成に向けて試行錯誤を重ねながら、学習内容や学習評価を整理、分析するためのシートについても、よりよいものにしていくための検討・改善を行ってきた。今年度は、これまでの研究成果をもとに、4つのシートからなる「単元計画評価シート」の活用を進めた。その中の1つである「単元評価シート」を活用した成果として、学習評価を授業改善に活用することにつながったという報告された。これは、昨年度の研究成果でも挙げられていたが、事例としては少数であり、学習評価の活用が課題としても挙げられていた。今年度の研究結果では、活用されたという事例が多数見られ、3年間の研究を通して、「合わせた指導」における各教科等の学習内容の明確化、学習評価の改善・充実という考え方が浸透してきたことでシートの活用が進み、単元、授業計画や実践に活かされたことが示唆された。

また、「単元評価シート」「確かな学び見取りシート」に関しては、『単元を通して目指す姿』を教員間で共通理解することにつながった『単元を通して目指す姿』から逆算して手立てや活動内容を考えることができた』という成果の報告もあった。「単元を通して目指す姿」を設定することで、単元全体を通して個々の児童生徒のどのような姿を目指すかが明確になり、また、単元で身に付けた学習内容や学び方を実際の生活の場面で活用する「確かな学び」を見取る際の視点を教員がもちやすくなるのと考えられる。その結果、単元を通してどのような姿を目指していけばよいかという視点から単元計画を考えやすくなったことが成果の要因だと考えられる。

2 今後の課題

3年次の研究において今後の課題と考えられたものは、以下の3つにまとめることができる。

○教育課程上の課題

○単元を通して目指す姿の設定についての課題

○「確かな学び」の見取りについての課題

3つの課題について、それぞれ内容を述べていく。

2-1 教育課程上の課題

昨年度の研究報告でも、教育課程上の課題として本校の教育課程と研究活動における学習評価との関連があげられていた。本校では、個々の児童生徒の重点目標である「年間指導目標」を設定しているが、個別の指導計画における指導目標及び評価は、主にこの「年間指導目標」について行ってきた。

また、本研究では、「確かな学び見取りシート」からも分かるように、「単元を通して目指す姿」の先の姿として児童生徒の「確かな学び」の姿を設定しており、「確かな学び」の姿と「年間指導目標」を一致させることを決まりとしてはいない。しかし、児童生徒の「確かな学び」の姿を個別の指導計画で設定した年間指導目標と重ねることで、「合わせた指導」の他の単元や、体育や音楽等の教科別の指導、保護者や家庭との連携も取りやすくなるのではないかという意見も挙がった。

今後は、本研究で得られた成果をもとに、実践を重ねながら単元における各教科等の学習状況や学習評価、「単元を通して目指す姿」や「確かな学び」等と個別の指導計画の関連を図っていくことが必要と考える。そうすることで、教育課程と各教科等や合わせた指導の単元、授業とのつながりがより明確になり、個々の児童生徒の指導・支援に系統的にあたることがより一層可能になると考えられる。

また、各学部で検討した「『確かな学び』を育む授業づくりの要点」については、実践してみた結果、「理論的背景が不十分であった」、「要点をまとめた書式の見にくさがあった」、「教員の専門性の向上の必要が必要である」等の報告もあった。今年度は、各学部の現状から授業づくりの要点を検討したため、学部間の系統性については不十分なものであるという課題も残っている。本校では、一昨年度より教育課程検討委員会を立ち上げ、教育課程の見直し・改善に取り組んでいる。今後も、教育課程検討委員会と連携し、学校として目指す児童生徒像をもとにした、個々の児童生徒の年間指導目標を設定することで、授業づくりの考え方に関しても学部間で相互理解を深め、授業づくりの要点のブラッシュアップが可能になるのではないかと考える。

2-2 「単元を通して目指す姿」の設定についての課題

今年度より、各児童生徒に「単元を通して目指す姿」を設定し各学部からは、指導方針の共有や教員間の共通理解を図れたなどの成果の報告があった。しかし、一方で、その設定にあたって、「何をもとにして考えれば良いのか分からない」、「単元が変わっても結局同じ姿を目指すことになってしまわないか」といった意見も報告された。「単元を通して目指す姿」は、個々の児童生徒の年間指導目標と単元で取り扱う各教科等の学習内容を踏まえて検討することとしたが、実際にどのような姿を設定するかは、各教員の裁量に任せられた。

高等部の実践の中には、本校のキャリア教育の視点である「将来像（自己実現をしている生活を想定した、児童生徒の23～25歳時の姿）」をもとに「単元を通して目指す姿」を検討したという報告もあった。高等部は、学校生活からの卒業と働く生活の始まりが近づいている段階であることを踏まえ、高等部の3年間で卒業後の生活の在り方を考え、決定していく時期と位置づけており、将来像の「現実化」を目指した実践を行っている。そのため、学校生活で達成を目指す年間指導目標と将来の姿である「将来像」が重なることが多いことが予想される。

一方で、小学部は「単元を通して目指す姿」と各教科等の学習内容や目的のつながりを明確にするために、「単元を通して目指す姿」を3つの柱（知識及び技能、思考力・判断力・表現力等、学びに向かう力・人間性等）で整理した。

このように、「単元を通して目指す姿」の設定には、学部ごとの違いや捉え方の曖昧さも残っている。今後は、これらの報告をもとに、各学部の実情や児童生徒の実態などを考慮して、各学部としての考え方を整理するとともに、学校としてどのように捉え、設定していくかを整理していくことが必要と考える。

2-3 「確かな学び」についての課題

「単元を通して目指す姿」と「確かな学び」とのつながりについては、「『確かな学び』見取りシート」を活用したことで、考え方が分かりやすかったという報告があった。また一方では、単元計画や他の授業との関連についての検討の必要性、見取る期間についての検討の必要性が報告された。

知的障害のある児童生徒は、単元が終了したからといって、単元で学習した内容を他の場面で活かせるとは限らない。葉石ら（2019）は、「独力での課題解決に困難を生じる可能性が高い知的障害児・者に対しては、遂行すべき課題の学習当初は、他者との共同活動を必要とすることが多い。」と述べ、そのことを踏まえ、知的障害児・者の課題解決場面での働きかけの質の点で配慮すべき事柄として、「必要に応じて手がかりとなる行動や考え方を指示的ではなく、間接的に示すこと。行動や考えを対象化し、吟味する機会を作り出すようにすること。」（葉石ら,2019）などを挙げている。本研究を通して、「確かな学び」を育むためには、単元、授業計画、実践において、各学部で検討した『『確かな学び』を育むための授業づくりの要点』を取り入れて授業を行うことが効果的であることが明らかになった。しかし、それらに加え、日常生活を含めた他の場面や授業との関連を意識した授業づくりや、児童生徒自身が考え、選択・決定する機会を意図的に設定すること、支援や手立てを教員間で共有し、自律的な行動がみられるようになったら徐々に支援を減らしていくことといった、支援・手立てや意図的な環境作りが必要であり、それを適切に行うことが重要だと考えられる。

「確かな学び」を見取る期間についても、本研究においては、単元終了後、短期間で児童生徒の姿の一場面を切り取ったものが多かった。そのため、本当にその姿が様々な場面で、また、継続して見られているのかということに関しての経過を検証するには至っていない。そのため、今後は環境作りを行いながら、「確かな学び」を長期的に評価していく必要があると考える。

また、「確かな学び」の見取りのために、記入するシートが増えたことで負担感が増加したという課題もある。「単元計画評価シート」は本研究の目的を達成するための手段として作成、活用してきた。昨年度まで使用していたシートを一つの書式にまとめたことで、振り返りのしやすさ、記入のしやすさ、一覧性が向上して、振り返りがしやすくなったといった成果が報告されたが、入力の方法などについて課題点も報告されている。本研究の目的は、児童生徒の学びの状況を把握し、その学習評価を授業づくりに生かしていくことであり、全てのシートに事細かに入力することではない。これらの意見を踏まえ、今後、本研究で得られた成果を日々の実践で活用できるようにしていくためには、実践に活かしやすく、授業づくりに真に効果的に活用できるように、「単元計画評価シート」の書式の改善も含め、継続して活用・改善を図っていくことが必要であると考えられる。

引用文献

- ・ 葉石光一、池田吉史、大庭重治（2019）「知的障害児・者における行動・認知の社会的側面と課題遂行支援」上越教育大学特別支援教育実践研究センター紀要第 25 巻 47-52

おわりに

副校長 柳澤 真美

「各教科等を合わせた指導」における学習評価について研究した3年間がおわります。

学習指導要領の改訂を背景に、改めて、教師が「各教科等」の観点から児童生徒の学習状況を適切に評価することができるようになること、効果的な学習指導を計画すること、児童生徒の学びを起点としたカリキュラムマネジメントへつなげることを目指した研究でした。各教科等の目標・内容を踏まえた単元計画、授業デザインが意識できるようになり、日々の授業での学習評価の確実性が上がってきた二年間を経て、本年度は、児童生徒の「確かな学び」に確実につなげる「授業づくりの要点」をまとめました。

研究テーマに掲げた「授業づくり」の要点をまとめるために、教員一人一人が授業実践を積み重ねながら、試行錯誤したこの一年の研究は、特に子供の姿をみる「時」が多かった、長かったと感じています。担当する授業中はもちろん、休み時間や担当外の授業でも子供の姿を見つめていました。学習指導要領を開き、パソコンで単元の計画や評価を記録している時も子供の姿を思い浮かべていました。学部教員間で子供の姿を共有する話し合いがたくさんされました。

子供たちの学びのために、子供たちのことを考え、子供たちのことを見つめる。そして、意見を出しあい、考え抜いて授業づくりを行う。本研究は、たくさん子供たちの話をすることができる、これ以上ないくらいの「教員の研修」になったのではないかと思います。

とはいえ、本研究は一旦まとめとしましたが、「児童生徒の『確かな学び』を育む授業づくり」の完成とは言えず、多様な経歴や経験を持つ教員が「児童生徒の『確かな学び』を育む授業」をつくることができるようになるためには、今後も絶えない研鑽が必要です。

本校は、開校以来「総合学習」をかかげて、生活に即した学習や体験的な学習を効率よく効果的に編成できる「各教科等を合わせた指導」によって、知的障害のある児童生徒一人一人の持てる力を最大限に発現させ、社会の主体としてたくましく生活できるよう育ててきました。卒業生は、その人らしい「自立と社会参加」を果たしています。私たちは、卒業生の姿から知的障害のある人が自立し社会参加している姿を知り、本校の子供たち一人ひとりの自立し社会参加している姿を思い描き、「各教科等を合わせた指導」によって、一人ひとりの持てる力を最大限に発揮させ、社会の主体としてたくましく生活することができるように教育活動を展開していくことをつづけます。

本研究を経て、さらに子供たちの「確かな学び」が進むよう、今後も教員一同、埼玉県教育委員会の先生方をはじめ、埼玉大学教育学部の先生方のご指導ご協力をいただきながら、たくさん子供の姿をみて、研究を推進していきたいと思います。

おかげさまをもちまして本年度の実践研究を研究集録としてまとめることができました。本校の教育活動並びに研究活動について、多くの皆様から様々な視点からのご指導ご鞭撻を賜れば幸いです。引き続き本校をよろしくお願いいたします。

研究・実践者

【校長】石川 泰成 【副校長】柳 澤 真 美

【教諭】

小主事	今井あゆり	中主事	三浦駿介	高主事	関根貴博
小1組	岩 淵 睦	中1年	長谷川秀丸	高1年	岩瀬由莉
小1組	木 皿 優○	中1年	丸 山 碧	高1年	須 田 淳
小1組	外山小織	中2年	福士夏美	高1年	渡部真由子
小2組	佐 藤 孝○	中2年	谷内田 怜	高2年	松岡加織
小2組	神保まなみ	中3年	鈴木健太	高2年	峯 岸 誠○
小3組	三浦光里	中3年	福谷ちづる○	高3年	齊藤可奈子
小3組	吉野時緒	研究主任	柳瀬貴之○	高3年	鈴木隆生○
教務主任	大崎由香里			進路指導	茂木絢美
養護教諭	石塚里沙			担 外	平田祐也

○…研究企画係